

## 〔表紙写真解説〕

宇目町千束に鎮座する鳶野尾神社の秋祭り(九月下旬)に、奉納される楽(千束楽)で太鼓踊りである。鉦打ちと道化役を従えた四名の太鼓打ちの間に、単独の六名の太鼓打ちが入って円陣を作る。楽は、カンカン・ミロガタ・テンガタ・テイ・小スリバチ・大スリバチ・ツチゴザ・テイ・ツツ・トナリの九番である。

楽は、鳶野尾神社境内を最初に、一キはなれた八匹原の御旅所で打ち、還御の時は、御旅所、小学校、神社の順に打って終る。

千束楽は、太鼓打ちの背で多彩な花が揺れ、道化役が笑いを巻き起こす、南国的な明るい楽である。安永五年(一七七六)に始めた富尾神社(大原)の楽を習ったという。千束楽は昭和四十一年三月二十二日、県指定重要無形文化財となった(引用資料は『ふるさとの文化財―うめまち』・『大分県の文化財』を使用、写真は宇目町総務企画課の後藤弘喜さんの提供による)。(矢野)

## 吹原峠

直川村大字赤木吹原と佐伯市堅田地区の大越との境にある峠で、県道赤木吹原佐伯線が通る。標高二四〇呎。天正六年(一五七八)日向高城・耳川の戦いで大友宗麟の部将佐伯氏一二代惟教父子三人は戦死。同十四年(一五八六)島津義久は弟家久に薩摩・日向の軍勢二〇〇〇人余をつけ、赤木から吹原峠を越え大越川に沿った轟、辺田、中大越を攻略させ、堅田平野の各地で戦鬪を交えたと伝える。

島津軍は本陣を轟に置き、主戦場は大越の長瀬原となった。地の利を得た佐伯軍はここで薩日軍に壊滅的な打撃を与えて大勝した。この堅田合戦で、戦死した敵味方の軍を祀ったという「日輪当午塔」(俗に千人塚)が吹原峠から北東六丁の地点(大越川流域)にある。

また、吹原の路傍には笠地藏塔がある。高さ一・五呎、明応五年(一四九六)の造立。島津軍がここを通ったときにはすでに九〇年の歴史をもっていたことになる。耳の病にご利益があり、近郷近在の老若男女の香華が絶えなかったという。峠は道幅は狭いが現在は舗装され、道路改修が進んでおり、小型自動車は通れる。(直川村誌)